The research of kendo match analysis 4

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/677

剣道試合における分析的研究（Ⅳ）
－中学選手の技術－

恵土　孝吉・小田　佳子[*1]・渡辺　　香[*2]・三苫　保久[*3]

The research of kendo match analysis (Ⅳ)
—Skill of junior high school students—

Koukichi EDO, Yoshiko ODA, Kaori WATANABE, and Yasuhisa MITOMA

はじめに

剣道試合における研究は数多く行われている。その先駆的研究として笹原[6～13]の報告をあげることができる。その後、志藤ら[15]岩下[1]，恵土ら[2・3]，星川[2・23]，村田ら[21]によって剣道試合における発現打突の実態や一本の技を繰り出すまでの時間，あるいは発現打突に占める有効打突の割合が明らかにされてきた。これらの成果を踏まえ，更に恵土ら[4]は，剣道界の最高峰といわれる全日本剣道選手権大会で３度以上の優勝経験者二名の選手を超一流選手，その他の選手を一流選手として，それぞれの選手が中段の構えから一本の技を繰り出すまでの時間を分析することにより剣道における競技力の要因を明らかにした。また巽ら[19]は，恵土らが報告した超一流選手のうち，最多優勝（６回）者の一人「某選手」について10年間の追跡調査を行いその試合特性（移動軌跡など）を明らかにした。

本研究は剣道実施者としては極めて年数が浅い中学選手（初級・中級・上級）が試合時にどのような技によって勝敗（有効打突）を決しているのかについて調査し，その結果がどのような理由によるのかについて検討することを試みた。

Ⅰ　研究方法

1　有効打突の収集

1）対象試合を剣道熟練者４名（５～６段）が公式試合記録員として記録をした資料を用いた。

2）加えて，記録の正確性を期するために４台のＳＯＮＹ製ＶＴＲ機器を用いて対象試合全部についてＶＴＲに収録し，収録されたデータと記録員が記録したものを剣道熟練者１名（検者・５段）が映像を３～４回繰り返し観察した。技の分類で判断が困難なものについては記録員と検者との間で統一を図った。それでも判断の異なるものはデータから除いた。

Ⅱ　対象試合

1　初級レベル試合……中学に入学し，課外活動において剣道をはじめて竹刀を握ってから１～２年経過した１～２年生を対象とした大会とした。試合は平成11年10月２・３日に開催された，平成11年度小松市中学校剣道新人大会（161試合）である。

2　中級レベル試合……中学に入学し，課外活動において剣道をはじめて２～３年経過した２～３年生を対象とした大会とした。試合は平成11年７月17・18日に開催された，石川県中学校剣道大会（112試合）である。

3　上級レベル試合……全国都道府県の予選を勝ち抜いてきた選手が参加する大会を対象とした。試合は平成11年８月21・22日に開催された，第29回全国中学校剣道大会(314試合)である。三大会の総計試合数は587試合であった。

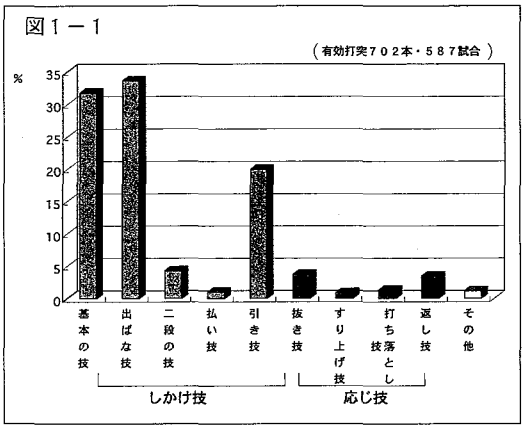
平成12年９月26日受理
*1金沢大学大学院教育学研究科在学中，*2中部大学健康科学，*3滋賀県立八幡高校

Ⅲ　結果

1　全試合における有効打突パーセント（初級・中級・上級）

図１－１に初級・中級・上級レベル試合における技分類別パーセント注）を示した。しかけ

図１－１



技は有効打突全体の90.6％を占め，応じ技は10.４％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の33.7％でありついで基本の技の31.７％，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技で１％以下であった。図１－２に技別のパーセントを示した。最も多いのは面で，ついで出ばな小手であった。最も少ないのは面すりあげ面などであった。図１－３は男女別に見たものである。男女とも最も多いのは面で，ついで出ばな小手であった。

図１－２

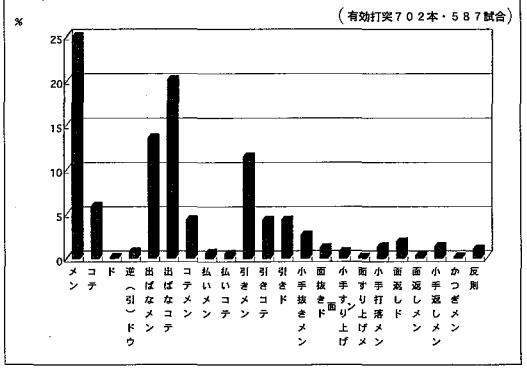
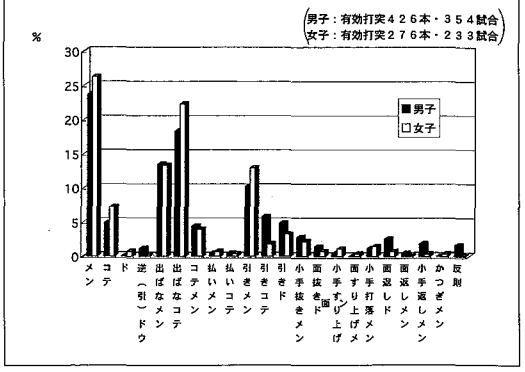


図１－３



2　初級レベル試合の有効打突パーセント

図２－１に初級レベル試合における技分類別パーセント注）を示した。しかけ技は有効打突全体の94.6％を占め，応じ技は8.8％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは基本の技40.7％，次いで出ばな技の32.3％であり，逆に少ないのは打ち落とし技や払い技などで１％以下であった。図２－２に技別のパーセントを示した。最も多いのは面で，ついで出ばな面であった。最も少ないのは払い面などであった。図２－３は男女別に見たものである。男女で最も多いのは面で，ついで男子は出ばな小手，女子は引き面であった。

図２－１

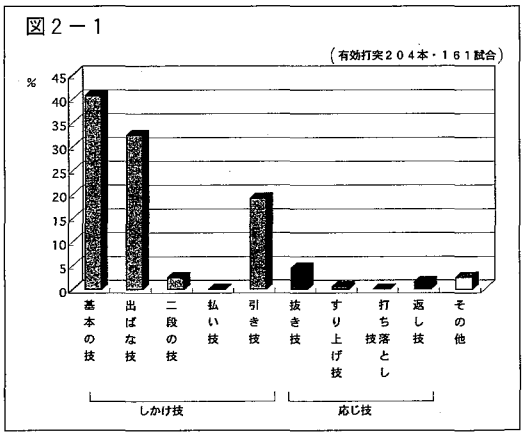


図２－２

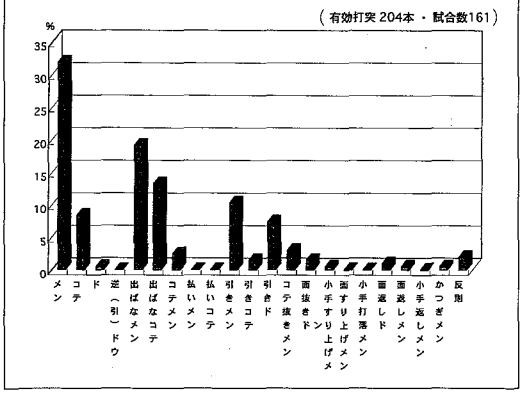


図３－１

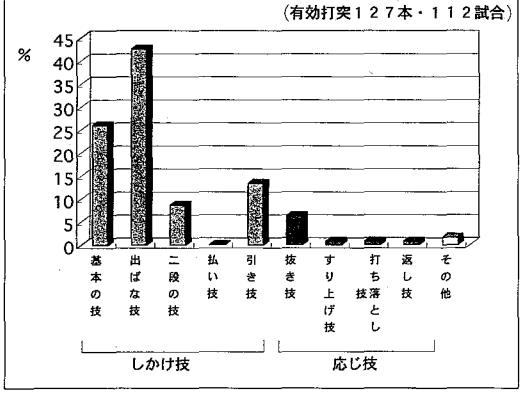


図２－３

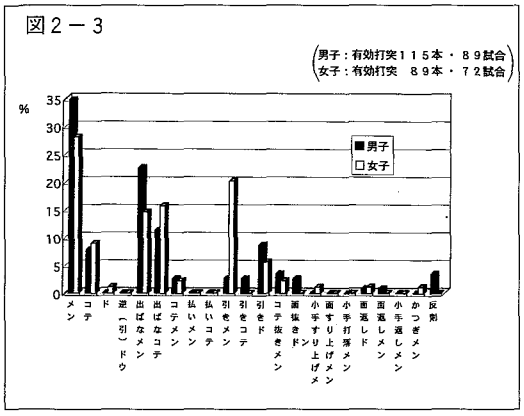


図３－２

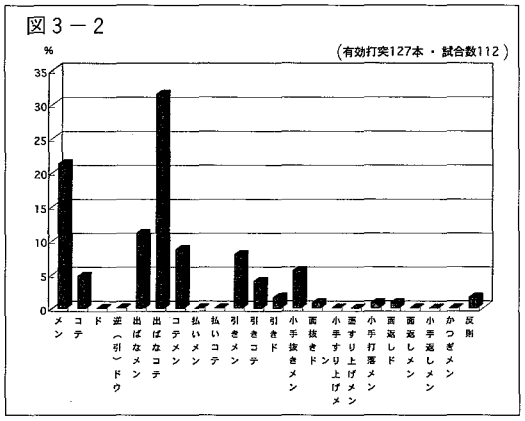
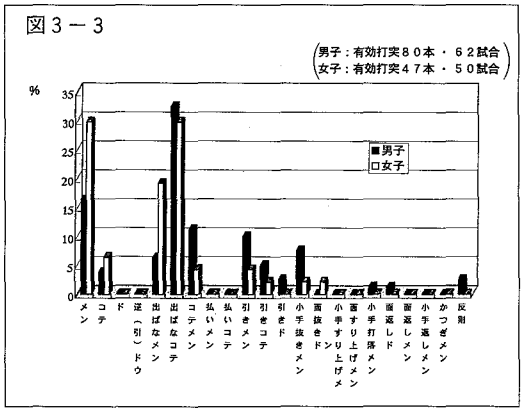


図３－３



3　中級レベル試合の有効打突パーセント

図３－１に中級レベル試合における技分類別パーセント注）を示した。しかけ技は有効打突全体の90.6%を占め，応じ技は10.2%であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の約42.5%でありついで基本の技の約26%，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技などで１%以下であった。図３－２に技別のパーセントを示した。最も多いのは出ばな小手で，ついで面であった。最も少ないのは払い小手などであった。図３－３は男女別に見たものである。男女とも最も多いのは出ばな小手で，ついで面あった。

4　上級レベル試合の有効打突パーセント

図４－１に上級レベル試合における技分類別パーセント注）を示した。しかけ技は有効打突全体の88.4%を占め，応じ技は11.6%であった。

しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の31.3％でありついで基本の技28.6％，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技などで２％以下であった。

図４－２に技別のパーセントを示した。最も多いのは面で，ついで出ばな小手であった。最も少ないのかつぎ面などであった。図４－３は男女別に見たものである。男女とも最も多いのは面で，ついで出ばな小手であった。（注…しかけ技，応じのパーセンテージは単純に各技ごとのパーセンテージを合計したものである。）

図４－１

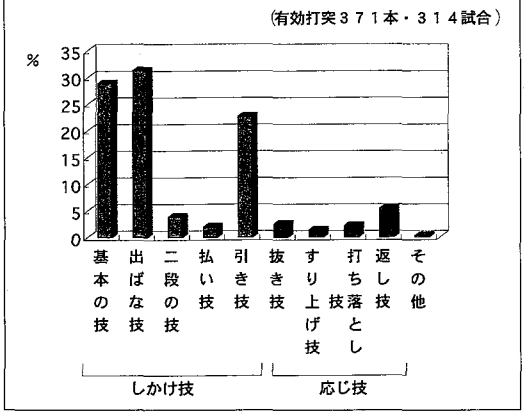


図４－２

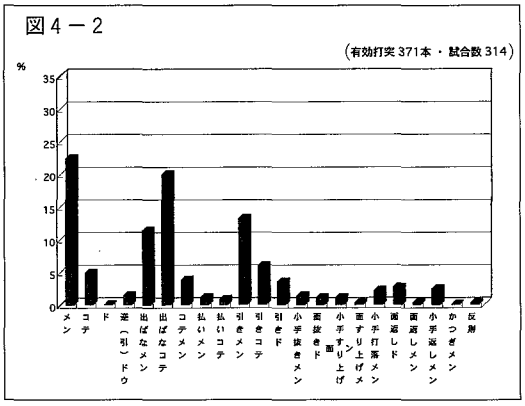
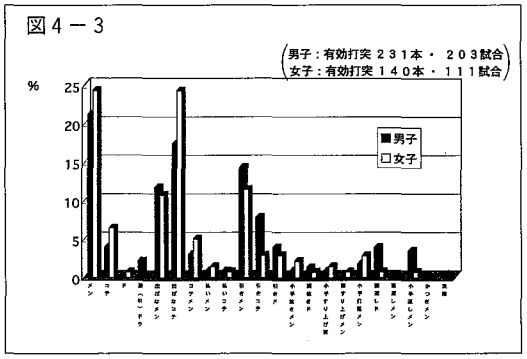


図４－３



Ⅳ　考　察

剣道の技術は大別して，相手自身によるすきを打突する技と相手を攻める技とに区分される「しかけ技」と，相手のしかけてきた打突を外し，そのすきを打突して勝ちを制する「応じ技」から成り立っている。[20]

全試合における技分類別結果は，しかけ技が全体で約91％，応じ技で約９％であった。この結果は惠土[3]が示した，全日本剣道選手権大会出場選手が有効打突を取得した割合よりもしかけ技で約16.5％高く，逆に応じ技で約16.4％少なかった。また，惠土[2]が高校生・中学生を対象として報告した値と比較すると前者の場合，しかけ技で約1.5％高く，応じ技で約1.5％少なかった。後者の場合しかけ技で約6.6％高く，応じ技で約6.6％少なかった。

一方，初級，中級，上級レベルと全日本剣道選手権大会出場選手[3]と比較すると，しかけ技は初級レベル試合で約19％，中級レベル試合で約16.1％，上級レベル試合で約13.6％高く，逆に応じ技は初級レベル試合で約16.7％，中級レベル試合で約15.3％，上級レベル試合で約13.9％少なかった。

以上のことから窺えることは，技術が高度になればなるほど，また，練習期間や経験年数，段位が多く高くなればなるほど試合時に有効打突となるしかけ技は減少傾向を示し，逆に応じ技は高くなる傾向である。また，これらの結果を異なる観点からのべれば，剣道未経験者が剣道を学び始めてから全日本剣道選手権大会出場までに試合時に有効打突となるしかけ技の減少率は，約16～17％，応じ技の増加率は約15～16％程度と考えられる。

剣道の経験が極めて浅い中学生レベルにおい

て，しかけ技の有効打突割合が圧倒的に高い理由の一つは，高堅[16]や笹森[14]らの広範囲で強い影響力が考えれれる。すなわち，現代剣道の中心的指導者で，かつ現在の筑波大学の前身であった高等師範学校教官でもあった高堅[16]は“剣道には攻むるありて受くるもの防ぐものなきなり“と練習の心得について説き，また，学生剣道を今日あらしめた，笹森[14]は“攻撃は最大の防御“である。とか“試合においては，この先をかけて勝ちを取るようにはげまなければならない。これは試合に当たって一番大事な心得である“と説ている。したがって，このような考え方はその指導を受けた者によって疑いのない正論として受け取られ，受け継がれる事となる。例えば，文部省指定の「武道指導推進校研究」発表報告書や，初心者を対象にした実際の正課，課外の練習内容を観察してみても繰り出される技や指導される技は圧倒的にしかけ技が多く見受けられる。当然の事ながら試合では学習・練習した技が多く発揮され，その結果として決まり技も学習・練習頻度の高い技が見受けられることとなった。

次に打突動作の容易性が挙げられる。応じ技は，相手の打突を外し，そのすきを打突して勝ちを制する技である。[20]したがって応じ技は相手が打突後立ち直らないうちに打突しなくてはならない。具体的には相手を打突する過程において相手の打突を外すように行うのであって，二つの動作を一拍子で行うことが肝要である。[20]と言われるように，身体としない操作が複雑，高度となる。剣道を開始してその経験が極めて浅い中学生レベルでは一方的にしかける技は比較的容易であっても，いつ，どこから(距離)，どこの部位に打ち込んでくるか判断がつきにくい応じ技はしかけ技と比較すると非常に困難な技となり，試合時には容易に発揮出来なかったものと推察される。

（なお，技別についての考察は小田の平成12年度金沢大学大学院教育研究科の修士論文で示す）

Ⅴ　まとめ

本研究は剣道実施者として，極めて年数が浅い中学選手を対象に，試合時にどのような技によって勝敗が決せられているのかについて調査することを試みた。その結果以下の知見を得た。

1　全試合における有効打突パーセント

初級・中級・上級レベル試合における技分類別パーセントは，しかけ技は有効打突全体の約91％を占め，応じ技は約９％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の約34％でありついで基本技の約32％，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技などで１％以下であった。

2　初級レベル試合の有効打突パーセント(男女)

しかけ技は有効打突全体の約94％を占め，応じ技は約６％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは基本技の約40％，ついで出ばな技の約32％であり，逆に少ないのはすり上げ技や払い技などで１％以下であった。

3　中級レベル試合の有効打突パーセント(男女)

しかけ技は有効打突全体の約91％を占め，応じ技は約８％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の約43％でありついで基本技の約26％，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技などで１％以下であった。

4　上級レベル試合の有効打突パーセント(男女)

しかけ技は有効打突全体の約88％を占め，応じ技は約11％であった。しかけ技，応じ技で最も多いのは出ばな技の約31％でありついで基本技の約27％，逆に少ないのが，すり上げ技や払い技などで２％以下であった。

引用文献

1）岩下巳伸　剣道の試合に関する研究（その１）試合開始後における最初の「先」の技について　体育学研究　12（５）1968
2）恵土孝吉　剣道試合における分析的研究（11）—中・高校生の技術　金沢大学教育学部教科教育研究20号　1984
3）恵土孝吉ら　剣道　中部日本教育文化会）197491

4）惠土孝吉ら　剣道試合における分析的研究―超一流選手の技術―　金沢大学教育学部紀要 48　1999
5）剣道日本編集部　スポーツ医学が解剖する，宮崎の強さ　月間剣道日本２月号　1992
6）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第１報）武道学研究　1（1）1968
7）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究　武道学研究　2（2）1970
8）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第２報）　武道学研究　2（1）　1969
9）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第３報）　武道学研究　3（2）　1970
10）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第４報）　武道学研究　4（2）　1971
11）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第５報）　武道学研究　5（2）　1972
12）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究（第６報）　武道学研究　6（2）　1973
13）笹原六郎　剣道試合における勝敗の分析的研究－全国教職員大会，国体出場選手の場合－武道学研究　9（2）　1976
14）笹森順三　剣道　加藤文明社　1969　p197
15）志藤義孝　スポーツ剣道の一考察　埼玉大学紀要　14　1974
16）高堅佐三郎　剣道　剣道發行所　19　15　P163
17）竹内虎士　剣道における防御の不応期　武道学研究　11（2）　1976
18）内匠屋　潔　剣道試合分析（初太刀について）日本体育学会第26回大会号　1975
19）巽　申直（武道学研究投稿中）
20）三橋秀三　剣道　　大修館　1972
21）村田憲三　剣道の応じ技について　体育学研究　13（5）　1969
22）星川　保　　剣道の打突動作，防御動作の時間的関係からみた剣道技術の特性　武道学研究　11（2）　1978
23）　星川　保　退官記念・星川　保教授論文集　1996